

## 聖日伝道礼拝説教要旨【2019年7月28日】

### 「安心して行きなさい」

マルコによる福音書 5章 21節～34節

説 教 久保田拓志伝道師

長血と呼ばれる病に苦しめられてきた、一人の婦人が、ここに登場します。12年間も病に苦しんだだけではなく、多くの医者に苦しめられ、治療に全財産を使い果たしてしまったというのです。12という数字は、旧約聖書においても新約聖書においても重要な数字として登場してきます。神に選ばれ祝福された者の象徴として用いられてきた12という数字が、この婦人の苦しみの歳月と重ね合わせられて用いられているのです。また、この婦人の「病」という文字に用いられている聖書の元の言葉には、鞭を意味する言葉が使われています。鞭、すなわち、婦人の病は何等かの罰が神からくだされているという、人々の冷たい視線にもさらされていました。

神様の罰がくだったと人々から思われた12年の歳月、全財産を失い、病に苦しみ、人間不信に苦しみ続けた喪失の12年は、しかし、イエス様によって、聖書の指し示す本来の12年、すなわち神様の選びと祝福の12年へと変えられたのです。

この不治の病を抱えた婦人は、群衆にまぎれて、後ろからイエスの服に、そっとさわりました。それが精一杯のそして唯一のイエス様への懇願であり、それは12年間の苦しみの訴えでもありました。婦人は、病気が癒されたことを体感じた、とあります。

そして、イエス様は自分の内から力が出ていったことに気付いたとあります。そこには、言葉のやり取りは一切ありません。いや、この婦人とイエス様は、顔すらも合わせていませんでした。婦人の悲しみ、苦しみ、怒り、絶望、そのすべての思いを込めて、人目をばかるとして、イエス様の背後から近づき、その衣服に触れただけでした。

私たちの救いのために、イエス様はその力を用いてくださるお方です。力がぬけていくというのは、力を奪い取られるということではありません。むしろ、その逆です。力を発揮するとか、その人の前に出て行って、その人の盾になって、力を振るうという意味です。

イエス様は、力を用いようとして用いたわけではなかった。しかし、父なる神の御心がその力を用いることをお許しになったのです。だからこそ、イエス様は、押し迫る群衆の中で、この婦人を探し求めました。もはや、隠れておくことはできないと、観念した婦人は、恐れおののきながら、イエス様の前に進み出ました。そして、なぜイエス様の衣に触れようとしたのか、その思いのたけのすべてを語ったことでしょう。

それを聞いたイエス様は驚くべき言葉を発します。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」と。

この婦人にあった思いは、御衣に触れば自分の病を癒していただけるかもしれない、という、ただそれだけの思いでした。12年間の苦しみの歳月が、この婦人から目に見える財産も目に見えない誇りも尊厳もすべてを奪い去りました。しかし、最後の瞬間に、そんな自分を守るために着込んでいたすべての鎧を脱ぎ捨て、必死の思いで、イエス様の衣にふれた時、実は、この時、触れたのは神様のほうであり、婦人ではなかったのです。婦人が触れたのは、目に見える衣でしたが、この時、婦人は神様の力に触れたのです。だからこそ、イエス様がその婦人を探し求め、顔と顔を合わせてお会いになることを望み、娘よと声をかけられました。信仰とは、私という存在の中で、じっと抱えこんでいるものではありません。信仰とは、イエス様を慕い求め、そして、イエス様を探し求められ、追いかけられ、神様の御力に触れていただくという、神様と私との関係性の中でおきてくるダイナミックな営みです。

「安心して行きなさい。すっきりなおって、達者でいなさい。」とイエス様はさらに言葉をつけました。娘よ、神に愛された本来の自分自身となって、神様がお与えになった平和のうちにここから新しい人生の一步を踏み出しなさい、もう、自分で作り上げた古い鎧を着る必要はない、新しい衣を、イエス・キリストという衣を身にまとして、生きていきなさい、聖霊なる神様の力が、これからは、盾となって、あなたの人生を守り導く、とイエス様は愛の呼びかけをされたのです。

十字架にかけられ、死んでよみがえられたイエス様は、聖霊なる神として、この礼拝にも、今日もまた生きて働き、私たちの盾となり、共に人生の旅路を歩もうとしてくださるお方です。そのお方に「あなたの信仰」と呼んでいただける恵みに私たちは、皆、与っています。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっきりなおって、達者でいなさい」

私たち一人ひとりにかけている言葉です。どうか、このみ言葉を身体全体で受け止めていただきたいと思います。そして、安心して、この礼拝から新しい一週間の歩みを始めたいと願います。

(記 久保田拓志)